

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：10102

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19H01708

研究課題名(和文)理論と実践の往還・融合を担う教師教育者の資質・能力の解明と質保証に関する研究

研究課題名(英文) Research on elucidation and quality assurance of competencies of teacher educator who are responsible for the fusion of theory and practice

研究代表者

姫野 完治 (Himeno, Kanji)

北海道教育大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号：30359559

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、教員養成を担う教師教育者に焦点を当て、教師教育者の概念を整理するとともに、教師教育者自身が教師教育者にどのような資質や能力、経験が必要と考えているのか等について調査し、教職経験を有する研究者教員、教職経験のない研究者教員、そして実務家教員の認識を比較検討した。また、教職大学院において実践研究指導に携わっている教師教育者や、教員養成と現職教育の両方の指導に携わってきた実務家教員を対象としてインタビュー調査を行うことを通じて、教育実践研究の指導を行う上での留意点や、教師教育者としての変容プロセス、その要因を解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

諸外国と日本に共通して、教師教育者の役割や行動に関する研究が進められているものの、日本では諸外国の知見の紹介に留まり、日本の教師教育者に求められる役割や行動の解明には至っていなかった。このような中、本研究が教師教育者の役割や行動に対する教師教育者自身の認識を調査し、その認識の差異を分析したことは、今後の教師教育研究を進めていく上での基盤となる。また、多様な背景を持つ教師教育者が属する大学において、教師教育者としての力量形成や協働の在り方を検討する際の基礎的知見として位置づけられると考える。

研究成果の概要(英文)：In this research, we focused on teacher educators who are responsible for teacher training, and organized the concept of teacher educators. We investigated what kind of qualifications, abilities, and experiences the teacher educators think they need. We divided them into three groups: researcher teachers with teaching experience, researcher teachers without teaching experience, and practitioner teachers, and compared their perceptions. In addition, we conducted an interview survey of teacher educators who are involved in practical research at graduate schools for teachers, and practitioner teachers who have been involved in teaching both teacher training and in-service education. Through these, we clarified the points to keep in mind when teaching educational practice research, the process of transformation as a teacher educator, and the factors behind it.

研究分野：教育学

キーワード：教師教育者 理論と実践の往還 資質・能力 質保証

1. 研究開始当初の背景

教師教育の枠組み変容と教師教育者へのまなざし

社会が急速に変化するなか、未来を拓く子どもの教育に携わる教師の資質能力の向上が喫緊の課題となっている。これまでも教員養成や現職研修のあり方が検討されてきたが、近年、教員養成・採用・研修を一体的に改革する新たな仕組みづくりが模索されている。とりわけ、2008年度以降に教職大学院が創設されたことを契機に、教員養成と現職研修の枠組みが大きく変わりつつある。これまでの教師教育では、理論的研究を専門とする大学教員が教員養成を、実務経験の豊富な指導主事や管理職等が現職教員の研修を主に担ってきた。このように教員養成と現職研修はほぼ別々に行われてきたため、指導者と学習者のペアはほぼ固定され、各々の文化に依拠して営まれてきた。これが、2008年度以降、実務経験を有する教員（いわゆる実務家教員）を4割以上配置することが義務付けられた教職大学院が創設され、教師教育の担い手と学び手、養成・研修の場が転換し始めている。このような教師教育の枠組み変容に伴い、教員養成や現職研修を担う教師教育者の役割や専門性開発に注目が集まってきている。

すなわち、これまでのように養成と研修を区別していた際は、それぞれのロジックや文化・文脈において、必要となる教師教育者の資質能力を規定し、養成＝大学＝理論、研修＝現職＝実践のような対立構造で教師教育を実践してきた。しかし養成・採用・研修の「一体化」という枠組み変容に伴い、そこでの教師教育者とはどのような存在か、「理論と実践の往還」とは何か、「理論と実践」を担う教師教育者にどのような資質能力が求められるか、教師教育者の質をいかに保証するか等の新たな問いが生じてきている。

教師教育者研究の動向と、教師教育者研究を進める上で核心をなす学術的な「問い」

教員養成や現職研修を担う教師教育者への関心は、諸外国では1990年代から高まり始めた。今日では、学校教育の質を高める上で、教師教育者の質が重要な要素であると認識されている。諸外国における教師教育者を対象とした研究は、大きく2つの側面から推進されてきている。1つめは、専門職としての教師教育者の役割や行動のスタンダード化に関する研究である。制度が導入されたオランダやアメリカを発端として、教師教育者スタンダードに関係した研究が蓄積されている。2つめは、教師教育者の専門性開発および教師教育者の成長に関する研究である。

一方わが国では、教員養成や研修のあり方、プログラム開発に関する研究は豊富に蓄積されてきたものの、武田(2012)が「教師の資質を問う教師教育者の資質や実践のあり方はこれまで公に問われたことがないのである」と指摘するように、教員養成や研修を担う教師教育者については関心が向けられてこなかった。2010年代に入り、Korthagen et al(2001)による“Linking practice and theory”が武田ほか(2010)により翻訳され、諸外国の教師教育者研究が整理されたことを契機に、教師教育者への関心が高まりつつある。そして、先述したような教師教育者と学習者の枠組み変容に伴い、教師教育者としての研究者教員と実務家教員の役割領域のあり方に注目が集まるなど、制度的・規範的な検討がなされ始めた。

しかし実際には、教師教育の要と位置付けられている「理論と実践の往還」という言葉が独り歩きし、「理論と実践の往還とは何か」を総括する理論がない中で、大学と学校を行き来すれば、あるいは研究者教員と実務家教員の両者から学べば、理論と実践が往還できるという表層的な捉えに終始しているきらいがある。また、研究者教員と実務家教員が相互に干渉しないような役割分業が暗黙裡に了解され、教員養成・採用・研修に携わる「教師教育者」として求められる資質・能力とは何か等の本質的な問いが置き去りにされる傾向がある。教師教育の枠組みが大きく

変わりつつある今、「理論と実践の往還とは何か」「それを担う教師教育者に不可欠な資質・能力とは何か」「そのような資質・能力をいかに保証するのか」等、今後の教師教育の基盤となる研究が求められている。

2. 研究の目的

本研究は、(1)理論と実践を往還・融合する教師教育者を規定する概念整理と能力の解明、(2)教師教育者の質保証制度の構築を目的とし、4つの課題に取り組む。

- 1)教師教育者の概念整理とその構造化
- 2)教師教育者(大学教員、管理職、メンター等)を対象とした教師発達観に関する調査
- 3)理論と実践を往還・融合する教師教育者の核となる資質・能力・信念の解明
- 4)教師教育者の質保証のための制度設計

3. 研究の方法

3年間の全体計画

本研究は、上記研究目的のもと、具体的に4つの研究課題に取り組む。

【研究課題1) 教師教育者の概念整理とその構造化】

教師教育者に関する研究は、先進諸外国、とりわけオランダやアメリカで推進されてきている。その全体傾向は、Lunenbergh, M. et al (2014) によって整理されているが、それ以降の4年間で急速に進展してきている。海外の学会誌を整理分析するとともに、聞き取り調査を行うことにより、日本における教師教育者を捉える際の枠組みを構築する。

【研究課題2) 教師教育者の教師発達観に関する調査】

本研究代表者および分担者の一部で、2016年に大学教員を対象とした調査を行い、研究者教員と実務家教員との間には、職務に費やす時間や他教員との連携、大学卒業時に身につけるべき資質能力や教師の学びの機会の捉え方をめぐり、少なからず違いがあることを明らかにした(姫野他2016)。本研究では、その成果をふまえ、教育実習生や初任者に対して指導的役割を担っている現職教師や、総合教育センターや教育研究所における研修を担う指導主事を対象とした調査を行うことを通して、多様な教師教育者の教師発達観を解明する。

【研究課題3) 教師教育者の資質・能力の明確化】

理論と実践の往還・融合が求められる教師教育者には、どのような資質・能力が必要か。例えば、各学校の教育活動の指導にあたる教育委員会の指導主事には、どのような資質・能力が求められるのか。もちろん授業や学級経営等の実践力も重要であるが、教師教育者としての素養が重要になる。しかしながら、教師教育者としての指導主事に求められる資質・能力基準は、全く規定されていない。研究課題1)をふまえ、各々の教師教育者に求められる核となる資質・能力を検討する。

【研究課題4) 教師教育者の質保証に関する制度設計】

教師教育者の質保証に関しては、学校現場では新任研究主任研修や新任教務主任研修、大学では課程認定制度やFD研修等が推進されてきているが、その多くは校内研修や教務の運営方法、教職授業の実施方法等に関する講義が中心で、理論と実践を往還・融合する教師教育者としての仕組みになり得ていなかった。国立大学教育実践研究関連センター協議会および全国教育系大学交流人事教員の会と連携し、教師教育者としての質保証の制度を構築する。

実際の研究スケジュール

研究一年目を終えた2020年春に新型コロナウイルス感染症が拡大したことに伴い、対面での

打ち合わせやデータ収集が困難となったこともあり、研究計画を延長し、最終的には2023年3月までの4か年で研究を遂行した。具体的な研究スケジュールを下表に示す。

	研究課題1) 教師教育者の概念整理とその構造化	研究課題2) 教師教育者の教師発達観に関する調査	研究課題3) 教師教育者の資質・能力の明確化	研究課題4) 教師教育者の質保証制度の設計
2019年	「理論と実践の往還」を総括する理論の検討	教師教育者(現職教員、大学教員)調査の項目策定	他領域の専門家の資質能力、スタンダードの情報収集	校内外の研修、FD等の収集と課題の検討
2020年	国内外の教師教育者概念の整理と日本の固有性の検討	教師教育者(現職教員、大学教員)調査の実施・分析	現職教員、大学教員等を対象とした聞き取り調査	↓
2021年	↓	↓	↓	教師教育者セミナーのプログラムと質保証の試案検討
2022年	日本における教師教育者の概念整理とその構造化	教師教育者の教師発達観の特徴と背景要因の解明	理論と実践を往還する教師教育者スタンダードの構築	教師教育者に関する成果発表

4. 研究成果

本研究では、大きく4つの研究成果を得た。

(1) 教師教育者の概念整理と資質・能力の明確化

教員養成に携わっている教師教育者自身が、教師教育者にはどのような資質能力が必要であり、どのような役割を果たしていると考えているのか、これらの認識を探索することに焦点を当てる。この時、Lunenberg et al. (2014) が示した教師教育者の6つの役割のうち、「教師の教師」と「研究者」に着目した。Lunenberg et al. (2014) は、教師教育者の役割等に関する先行研究を整理し、「教師の教師」「研究者」「コーチ」「カリキュラム開発者」「ゲートキーパー」「仲介者」という6つの役割を見だし、そのうち「教師の教師」と「研究者」が顕著に発見される役割であると指摘している。欧米の高等教育機関における教師教育者は、教師教育者になる以前に初等・中等教育機関での教職経験を有し、それが教師教育者を採用する際の重要な要件となっていることが多い(坂田 2010)。そのため、教師教育者としての役割の諸特性は、おのずと自身が教師であった時の知識や経験などがベースの一部として組み込まれ、教師としてのキャリアの延長線上に「教師の教師」という役割が位置付けられる。その上で、世界的な趨勢として、高等教育機関における教師教育者は「研究者」として研究を行うべきという役割が強調される。つまり、諸外国では一人の教師教育者が「教師の教師」と「研究者」の両役割を担う必要があり、そのような観点から教師教育者スタンダードが構築されている。

一方、日本の教員養成では、「教師の教師」と「研究者」という役割が一人の教師教育者の中で統合されているというよりは、従来の教員養成を担ってきた研究者教員が「研究者」としての役割を、新たに教員養成に参入した実務家教員が「教師の教師」という役割を担うという特徴がある。そのため、研究者教員がアカデミックな見方や考え方、メタ的な視点から実践を捉え、一方で実務家教員が学校や子どもの視点に立った見方や考え方を提供し、理論と実践を往還・融合することが期待されている。しかし実際には、研究者教員と実務家教員が相互に干渉しないような役割分業が暗黙裡に了解され、教師教育者として求められる「教師の教師」と「研究者」という役割が、教師教育において十分機能していないという課題が指摘されている(姫野ら 2019)。このような状況を鑑み、教員養成に携わっている教師教育者自身が、教師教育者にどのような資質能力が必要と考え、どのような役割を果たしているのかについて、研究者教員と実務家教員の認識の差を解明するため、教師教育者の概念を整理するとともに、(2)の調査で用いる教師教育

者として求められる「知識」「能力」「経験」を明確化した。

(2) 教師教育者に求められる資質能力や役割に対する認識

教師教育者に求められる資質能力や役割に対して、教職経験を有する研究者教員、教職経験のない研究者教員、そして実務家教員の認識の差を解明することを目的として、教員養成に携わる教師教育者 216 名を対象として質問紙調査を実施した。その結果、いずれの教員も、教師教育者には学問知や実践知、研究経験が必要と捉えていること、経験有研究者や経験無研究者と比べて実務家は、「協働して物事を遂行する力」や「自身の経験や事例をもとに教育・研究を進める力」を重視する傾向があること等が明らかになった。また、自らの研究を進める上では新奇性や根拠やデータに基づいて研究を進めることを重視している一方で、学生や現職教員の指導ではそれほど求めていないこと、その意識は、実務家と比べて経験有研究者や経験無研究者が強いこと等がわかった。さらに、「教師の教師」の役割意識は、大学の教師教育者に教育現場経験や実践研究経験を求め、教育実践への貢献を重視する研究観・指導観をもつなど、実践を主軸とする認識を導くことが示された。一方、「研究者」の役割意識は、教師教育者に学術研究の経験・遂行力を求め、学術的研究方法の適用を重視する研究観・指導観をもつなど、研究への志向性を現し、「教師の教師」の役割意識とは対照的なものとなった。しかし、両者の役割意識の違いによらず共通する認識や、両者間に輻輳的な相互作用関係のある可能性も示唆された。

教師教育改革が進められる中、その教師教育を担う教師教育者の質をどのように担保するかは、現在のところ具体的な施策は策定されていない。本研究で明らかにしたような、認識を異にする多様な教師教育者が共存する教員養成の実態をふまえつつ、諸外国のように教師教育者スタンダードを構築することの是非も含めて、教師教育者の質保証のための研究を推進するとともに、質保証のための仕組みを検討していくといった課題があることを明示化した。

(3) 教育実践研究の指導上の留意点の解明

教育実践研究を積極的に推進してきた教職大学院の教員が、どのような点に留意して大学院生に対して指導しているのかを、探索的に明らかにすることを目的として、異なる大学院に所属する 7 名の教員にインタビューを行った。発話内容の分析により、「指導方針」「教師としての力量形成の支援」「課題の設定や計画の支援」「記録・分析の支援」「執筆の支援」「リフレクションの支援」「学校現場との関わりへの意識」といった 7 つの概念を抽出することができた。

(4) 実務家教員の教師教育者としての認識変容のプロセス

学校現場と大学において指導経験を有する実務家教員 3 名を対象として、教師教育者としてのライフヒストリーについてインタビュー調査を行い、教師教育者としての認識の変容プロセスと、その要因を解明した。

< 引用文献 >

姫野完治・長谷川哲也・益子典文・竹内元・霜川正幸・植田和也・土田雄一・浦野弘 (2016) 教師の成長・発達と教員養成の役割に対する大学教員の意識, 日本教育工学会研究報告集, JSET16-5:23-30

Lunenberg, M., Dengerink, J., & Korthagen, F. (2014) The professional teacher educators. Sense Publishers. 武田信子・山辺恵理子 (監訳) (2017) 専門職としての教師教育者 - 教師を育てるひとの役割, 行動と成長. 玉川大学出版会

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計21件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 11件）

1. 著者名 川上綾子・姫野完治・長谷川哲也・益子典文	4. 巻 37
2. 論文標題 大学における教師教育者の役割意識に関する探索的検討：「教師の教師」と「研究者」の役割に焦点をあてて	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 鳴門教育大学学校教育研究紀要	6. 最初と最後の頁 71-82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24727/00029668	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 高橋賢治・姫野完治	4. 巻 13
2. 論文標題 同僚から学ぶことを主眼とした若手教師支援の研究	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 北海道教育大学大学院高度教職実践専攻研究紀要	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32150/00010927	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 姫野完治	4. 巻 31
2. 論文標題 教師教育研究を行う際の倫理的課題と心がけること	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本教師教育学会年報	6. 最初と最後の頁 141-142
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 今井則雄・岩田鈴生・金森香織・川瀬貴子・神出建太郎・益子典文	4. 巻 39(1)
2. 論文標題 「教員の成長段階」に応じた研修プログラム設計に関する一考察 - 選択研修における研修終了後アンケートのキャリアステージ毎の比較評価 -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 岐阜大学カリキュラム開発研究	6. 最初と最後の頁 135-144
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 坂本哲彦・静屋智・霜川正幸・時乗順一郎	4. 巻 55
2. 論文標題 学校実習の在り方に関する組織的検討 - 修了院生等への調査を踏まえた熟議を通して -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 107-116
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 霜川正幸・佐野之人・藤上真弓・田本正一・田中智輝・河村泉・江藤弘康・中村裕司・河村寛美	4. 巻 54
2. 論文標題 学部・附属と地域のつながりを深める「学びセミナー」の展開	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 65-74
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 姫野完治	4. 巻 44(1)
2. 論文標題 授業実施中の授業者の視線配布と思考様式の解明：主観カメラを活用した事例研究を通して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本教育工学会論文誌	6. 最初と最後の頁 95-104
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15077/jjet.43116	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小方直幸、植田和也、上野耕平、金網知征	4. 巻 42
2. 論文標題 教員志望意識の変容に関する回顧的調査	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 香川大学教育学部実践総合研究	6. 最初と最後の頁 27-36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Terashima, K. , & Itagaki, S.	4. 巻 EDULEARN20 Proceedings
2. 論文標題 Transfer of Training in Middle Leader Teachers' Professional Development for ICT Integration in Schools	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 12th International Conference on Education and New Learning Technologies	6. 最初と最後の頁 6422-6426
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.21125/edulearn.2020.1687	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 表昭浩・川上綾子	4. 巻 35
2. 論文標題 英語授業の教授言語：過去30年の日本語使用と英語使用の傾向	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 鳴門教育大学学校教育研究紀要	6. 最初と最後の頁 121-129
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 長谷川哲也・益子典文・今井亜湖	4. 巻 39
2. 論文標題 大学院の教師教育における研究方法・研究技術習得の意義 岐阜大学大学院教育学研究科での試み	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本教育大学協会研究年報	6. 最初と最後の頁 75-86
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長谷川哲也	4. 巻 29
2. 論文標題 『教員育成』がもたらす協働の姿と研究倫理の意義	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本教師教育学会年報	6. 最初と最後の頁 98-101
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 日比光治・益子典文・國府田珠実	4. 巻 37(1)
2. 論文標題 新規採用教師の初年度末の成長状況に関する一考察 - 「経験から学ぶ力」の自己 評価に基づく分析	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 岐阜大学カリキュラム開発研究	6. 最初と最後の頁 89-93
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 坂井和裕・益子典文	4. 巻 37(2)
2. 論文標題 外的要因による授業環境の変化が教職員の授業観に及ぼす影響の事例分析 - 新型 コロナウィルスによる 高等学校授業のオンライン化過程 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 岐阜大学カリキュラム開発研究	6. 最初と最後の頁 194-202
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Takashi Ikuta, Yasushi Gotho, Wataru Uchiyama	4. 巻 16
2. 論文標題 Case Study of Teacher 's On Going Cognition using VR	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 16th International Conference on Cognition and Exploratory Learning in Digital Age	6. 最初と最後の頁 417-420
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 生田孝至・林なおみ・内山 涉・伊藤祐輝	4. 巻 49
2. 論文標題 VRオン・ゴーイングにおける教師の認知	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 岐阜女子大学紀要	6. 最初と最後の頁 21-32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 霜川正幸	4. 巻 71
2. 論文標題 「ちゃぶ台」方式による教員養成・研修の一体化の取り組み	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 SYNAPSE	6. 最初と最後の頁 1-4
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 姫野完治・水上丈実・梅本宏之・橋本忠和	4. 巻 10
2. 論文標題 コンピテンシー・ベースのカリキュラム・マネジメントを中核とした教職大学院の授業開発	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 北海道教育大学大学院高度教職実践専攻研究紀要	6. 最初と最後の頁 71-81
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 土田雄一 松田憲子	4. 巻 23
2. 論文標題 学部授業における課題解決型授業の効果 - 「人間関係づくり教材開発」の授業分析を通して -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 千葉大学教育実践研究	6. 最初と最後の頁 25-37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 坂井和裕・益子典文・國府田珠実	4. 巻 36(1)
2. 論文標題 教育センターにおける現職教員研修評価に関する基礎的研究 岐阜県総合教育センターにおける教員研修評価の試み	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 岐阜大学カリキュラム開発研究	6. 最初と最後の頁 117-123
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 近藤健次・長澤紀明・坪内清次郎・堀内教子 鈴木健・坂井和裕・益子典文	4. 巻 36(1)
2. 論文標題 教育センターにおける教員研修の評価分析に関する事例研究 岐阜県総合教育センターにおける教員研修 評価の実践	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 岐阜大学カリキュラム開発研究	6. 最初と最後の頁 162-169
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計19件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 姫野完治・岸敬介・中村友
2. 発表標題 授業者の「みえ」をアノテーションとして用いた教師教育用VR教材の開発
3. 学会等名 日本教育工学会2022年秋季全国大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 姫野完治
2. 発表標題 教師の生涯発達とコミュニティ
3. 学会等名 日本教育心理学会2022年全国大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 寺嶋浩介
2. 発表標題 教育実践研究の指導上の留意点についての分析 - 教職大学院を担当する教員を対象として
3. 学会等名 日本教育工学会2023年春季全国大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 中谷仁、美丹信介、霜川正幸、佐々木司、静屋智、中田充、松岡敬興、美作健
2. 発表標題 教員の資質能力向上支援（ラーニングポイント制）につなぐミドルリーダー養成研修プログラムの開発」～独立行政法人教職員支援機構委嘱事業教員の資質向上のための研修プログラム開発・実施支援事業報告書から～
3. 学会等名 日本学校改善学会第4回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 姫野完治・長谷川哲也・益子典文・川上綾子・寺嶋浩介・霜川正幸・土田雄一・植田達也・生田孝至
2. 発表標題 学校と大学で教師教育に携わった経験を持つ実務家教員の「教師教育者としての認識」の形成と変容
3. 学会等名 日本教育工学会2021年春季全国大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 佐々祐之・小野寺基文・姫野完治・川俣智路・安川禎亮・佐川正人
2. 発表標題 教員養成学を基盤とした教職大学院のカリキュラム開発（ ） 教職大学院における研究指導と実践論文の在り方
3. 学会等名 日本教育大学協会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 磯部年晃・益子典文
2. 発表標題 学力調査に基づく授業改善活動を促進する教員研修プログラムの開発
3. 学会等名 日本科学教育学会第44回年会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 日比光治・益子典文
2. 発表標題 小学校初任教師の経験学習を促す校内環境に関する事例研究 - 環境設計者としての の管理職へのインタビュー調査を通して -
3. 学会等名 日本教育情報学会第36回年会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 姫野完治
2. 発表標題 「教師教育者としての認識」の変容過程からみえること
3. 学会等名 第15回全国教育系大学交流人事教員研究交流集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 姫野完治
2. 発表標題 授業実施中の教師の「みえ」の基盤となる認知的枠組みの分析
3. 学会等名 日本教育工学会2019年秋季全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 光内 亜理沙 ・ 姫野 完治
2. 発表標題 教職大学院生による授業中のみとりの解明と変容
3. 学会等名 日本教師学学会第21回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 佐野 正樹 ・ 青木 優汰 ・ 姫野 完治
2. 発表標題 教職経験年数による授業参観時のみえはどのように違うのか
3. 学会等名 日本教師学学会第21回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 生田孝至・林なおみ・内山 涉
2. 発表標題 VRオンゴーイングによる観察者の認知の生成 - Schonの問いへの挑戦
3. 学会等名 日本教師学学会第21回年次大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 生田孝至
2. 発表標題 VR授業映像を活用した校内研修の方法
3. 学会等名 日本教育実践学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 生田孝至・内山 涉・林なおみ・伊藤祐輝・越村尚貴
2. 発表標題 VRオンゴーイングにみる教師の授業認知の様相
3. 学会等名 日本教育工学会2020年春季全国大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 日比光治・益子典文
2. 発表標題 小学校初任教師の経験学習を可能にする条件
3. 学会等名 日本教育工学会2019年秋季全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 長谷川哲也
2. 発表標題 協働の「教員育成」における接続点としての教師教育研究
3. 学会等名 日本教師教育学会研究倫理規程を考える公開研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 長谷川哲也
2. 発表標題 今日の「教師教育者」とはどのような存在か？ 海外の研究動向と日本の実態に注目して
3. 学会等名 第15回全国教育系大学交流人事教員研究交流集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 長谷川哲也
2. 発表標題 今後の教員養成の方向性 教員養成政策と教師教育研究の動向に注目して
3. 学会等名 中部大学FD講演会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 姫野完治・川俣智路・後藤泰宏	4. 発行年 2022年
2. 出版社 一莖書房	5. 総ページ数 235
3. 書名 ICTを活用したこれからの学び ~次世代を担う教師のためのICT入門~	

1. 著者名 日本教育方法学会、子安潤、田上哲、熊井将太、川地亜弥子、遠藤ゆり、吉田成章、竹内元、姫野完治、照本祥敬、渡辺雅之、境智洋	4. 発行年 2020年
2. 出版社 図書文化	5. 総ページ数 152
3. 書名 公教育としての学校を問い直す	

1. 著者名 有馬道久・大久保智生・岡田涼・宮前涼子・姫野完治	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 180
3. 書名 学校に還す心理学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	益子 典文 (Mashiko Norifumi) (10219321)	岐阜大学・教育学部・教授 (13701)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	土田 雄一 (Tsuchida Yuichi) (10400805)	千葉大学・教育学部・教授 (12501)	
研究分担者	寺嶋 浩介 (Terashima Kosuke) (30367932)	大阪教育大学・連合教職実践研究科・准教授 (14403)	
研究分担者	川上 綾子 (Kawakami Ayako) (50291498)	鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・教授 (16102)	
研究分担者	霜川 正幸 (Shimokawa Masayuki) (80437615)	山口大学・教育学部・教授 (15501)	
研究分担者	植田 和也 (Ueda Kazuya) (90363176)	香川大学・教育学部・教授 (16201)	
研究分担者	長谷川 哲也 (Hsegawa tetsuya) (90631854)	岐阜大学・教育学部・准教授 (13701)	
研究分担者	生田 孝至 (Ikuta Takashi) (20018823)	岐阜女子大学・公私立大学の部局等・教授 (33702)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------